人さまざまな工夫をされている様子がうかがうことができました。せっかくのこうした工夫が一人のものに終わらないように、互いに成果を利用しあえるように、情報の交換の大切さを確認して、今後もこのような研究会を継続していくことになっています。

またすでに学部の性格上小人数クラスでの授業を実現している現代中国学部の教員から、環境が整備されていても、学生の自発的な勉強意欲に直接結びつくものではない、内容に関する工夫がより問題なのだという指摘がありました。

その他留学生向けの日本語を担当する先生からは、留学生と日本人学生との交流の機会が少ないのはとても残念だという指摘もありました。

外国語担当教員は、少しでもよい授業が出来ればと努力しています。そのためには教員の努力はもちろんのこと、学生の皆さんの意見を少しでも多く聞かせてほしいと思っています。意見や要望のある学生は、中央教室棟3階の語学教育研究室を訪ねてくださるか、あるいは授業の終わったときなど担当の先生に気軽に声をかけて、授業に関して何でも気の付いた事を話してください。今後の授業に役立てたいと思います。

Town と City

経営学部
安藤　聡

英語の‘town’と‘city’の違いは何か。多くの人は‘town’が「普通の町」で‘city’が「大都市」と考えるであろう。結果的にこれでほぼ正解である。前者に「町」、後者に「街」という漢字を当てはめて考える人も多い。「町」の原義は「田圃の中の畦道」だからこの字は何となく牧歌的な地方都市の風景を連想させるし、「街」は元来「道が交わる場所」すなわち「十字路」を意味していて、そうなると主要道路が交わるところには必ず主要都市があることからもわかるように、「街」が意味するのはそれなりに大きな都市なのである。

しかしながら「犬」と‘dog’が必ずしも等号で結ばれるとは限らないように、‘town'と「町」、‘city’と「街」が完全に対応するというわけでもない。話は逸れるがなぜ「犬」と‘dog’が同じでないのかと言えば、「犬」という漢字から普通の日本人は、あるいは少なくとも私は、柴犬、秋田犬、もしくは雑種の和犬を思い浮かべる。一方で‘dog’という英語が通常英語圏の人の心に喚起するものはまずこれらの種類の「犬」ではない。因みに私は‘dog’というとまずボーダーコリーをイメージする。

そのようなわけで、‘town’と「町」、‘city’と「街」もまたそれくらい異なる場合があるのだ。詳しく知りたければ辞書を「読む」のがよい。『ジーニアス英和辞典（第二版）』（大修館）によれば‘town’は「1. 町（village より大きく city より小さい）。2.［通例 the～］（田舎に対して）都会、町なか。3.［通例無冠詞で］（地域の中心となっている）都市。4.［the～;集合的に;単数・複数扱い］町民、市民;大学町の住民。5.（(米)）群区。6.（(英)）定期的に市（いち）が開かれる所。7. ペンギン［プレーリードッグ］の巣が多い所。」である（例文、補足説明は省略したが、本当はこういうところも読むとよい）。なぜペンギンとプレイリードッグなのかは大いに気になるところだが、それはともかく 1. の定義にも関わらず‘town’が意外にも「街」のニュアンスを含んでいることがわかった。そういえばポール・マッカートニーの曲に「ロンドン・タウン」というのがある。

一方‘city’はといえば、同じく『ジーニアス』によれば「1.（田舎に対して）都市、都会。2.（行政上の正式の）市（(米国では州の認可を受けた自治体で county の中の一単位。通例 town より大き

い。英国では国王の勅許を得たtownで、cathedralを有しbishopがいる))。3.［the～;集合的に;単数・複数扱い］その市の（全）市民、住民。4.［the C～］シティー（(London旧市内の中心部約1マイル四方の地域。英国の金融・商業の中心地;米国のWall Streetに相当))。（英国の）財界、金融界。」ということである（5.と6.は形容詞的用法なので省略)。ここで‘town’との違いを考える上では2.が重要であることがわかるだろう。要するにアメリカ合衆国では‘city’は「政令指定都市（のようなもの)」、連合王国では「大聖堂がある都市」を意味するのだ。従って‘city’は結果的に「大都市」ということになるのである。

ところが話はそれほど単純ではない。この定義からすると英国ではどんなに大都会であっても大聖堂（cathedral）がなければ‘city’と呼ぶことは出来ず、またいかに小さな町であっても大聖堂さえあればそれは‘city’なのである。ここで言う「大聖堂」とはアングリカン・チャーチ、別名チャーチ・オヴ・イングランド（日本語でよく「英国国教会」とか「イギリス国教会」などと言っているがいずれも不正確で、正しくは「イングランド国教会」）の大聖堂である。これはイングランドとウェイルズに約50あり、それぞれに主教（bishop）がいて周辺の市町村を「教区」（diocese）として管轄する。この教区は市町村ごとに「小教区」（parish）に分けられ、ひとつの小教区にひとつずつ「教会」（church）がある。スコットランドの‘city’には長老派プロテスタントの「スコットランド国教会」の大聖堂がある。大聖堂を持たない大都会はミッドランズ（イングランド中部）の工業地帯に多く、たとえばリーズ、ノッティンガム、ストウク-オン-トレントなどである。リーズは交通の要所でもありヨークシャー北部の羊毛、織物、機械工業の中心地で、ノッティンガムはロビン・フッドとレース織りとアラン・シリトウの小説で有名。ストウク-オン-トレントといえばウェッジウッド、エインズリー、ロイヤル・ドウルトンなどの陶器である。いずれも世界的に有名な大都市ではあるが、シティとは呼ばれない。大聖堂があって主教がいる街はたいてい古くから栄えていた街であるが、大聖堂のない大都会はその多くが産業革命以降に発展した工業都市である。

大聖堂を持つ小さな町ということになると、すぐに思い浮かぶのはウェルズとイーリーである。ウェルズ大聖堂は小さなウェルズの町に比例するかの如く英国で最も小さい。この町はむしろこの「英国最小の大聖堂」を観光の呼び物にしている。ここは中世の巡礼地グラストンベリーにも近く、またこの大聖堂の教区には有名な観光都市バースがある。むしろバースの街の中心にある修道院の方が大きくて風格があるので、こっちの方が「大聖堂」に見えるくらいである。一方のイーリーはフェンランズという平坦な沼沢地帯の、僅かに高くなった「丘」の上にある小さな町である。町の名前は近くを流れるグレイト・ウーズ川に鰻（eel）が多く生息していたことに由来する。町は小さいがイーリーの大聖堂は荘厳なものであり、周囲を平地に囲まれているためかなり遠くからでもその姿を眺めることが出来る。この大聖堂はフィリッパ・ピアスの童話『トムは真夜中の庭で』の中で、物語の背景として重要な役割を演じている。寒波で凍結したウーズ川をイーリーに向かってトムとハティがスケートで滑る場面ではこの大聖堂が彼らの憧れの象徴であり、また二人が大聖堂の塔に登る場面では塔の階段が彼らの成長を暗示している。この小さな町の大きな大聖堂は「イングランドで最も美しい大聖堂」と言われている。

ところで、英国は「例外」「不規則性」の国である。英文法は例外ばかりであり（非英語圏の英語学習者は皆このために苦労する)、あの国では都市計画から庭園様式に至るまであらゆるものが不規則である。そして英語の有名な諺に「例外なき法則なし」（There is no rule without exception.）というのがあるほどで、つまり何が言いたいかと言えば大聖堂を持たない‘city’も英国には確かにあるということである。主教がいなくとも特別に「シティ」のタイトルを与えられた街があり、先に言及したバースがそれである。私はこのことを最近まで知らなかったので、バースの交差点で「City

Centre」の道路標識を見るたびにこの街には主教がいるものとばかり思いこみ、例の修道院を大聖堂だと信じて疑わなかったのだ。あの小さなウェルズ大聖堂がこの世界遺産にもなっている立派な街を管轄しているという事実を知ったのは実はごく最近のことなのである。

2001年度 夏期アメリカ・セミナー雑感

法学部
片岡　邦好

この4月よりアメリカ交流委員に就任し（と思ったらもうこの委員会は改組されましたが)、夏期海外研修の引率で、初めてこのサウスイースト・ミズーリ州立大学（Southeast Missouri Sate University）のあるアメリカ、ミズーリ州、ケープジラードー（Cape Girardeau）を訪れました。ミシシッピ川沿いのこの町の由来は、まだアメリカ南部がフランス領だった18世紀、この地の監督官（？）だったフランス人Girardotにちなんで名づけられました。ミズーリという何やら南部の香り漂う地域性と（実際は南部と中西部の境界線辺りだそうです)、サウス・イーストという地方的な響きのためか、田舎の小さな大学を想像していましたが、これがなかなか立派で美しいキャンパスに少なからず驚きました。数あるアメリカの大学の中でも間違いなく平均以上に位置すると思います。日本で一番美しい大学がどこか、といった調査結果があるかどうか知りませんが、もし日本にあれば一・二を争うことでしょう。学生数8000人強の割には広いキャンパスと、緑に囲まれ起伏に富んだ丘陵に立つ、石造りの瀟洒な建物は歴史を感じさせます（1873年設立)。また、アメリカの大学では良く見かける光景ですが、木々にはリスが走り、あたりを鳥が（そして夕方には蛍も）飛び交う様子は心休まります。そして町外れを流れるのは、トム・ソーヤーで有名なミシシッピ川です。日本の大学は、ハード面では土地が限られているだけでなく、「ぼろは着てても心は錦」的精神論で建物に金をかけず（逆に、建物ばかりに金をかける「ハコもの大学」への批判もありますが)、学生の入学時の偏差値ばかりが強調されて、入学してからの環境とサポートへの配慮が少ない気がします。（ソフト面としての教授陣・大学運営があまり問題にされないことにも問題があります。）ハード面ばかりをいじるのは姑息だといった通念があるのかもしれませんが、「衣食足りて礼節を知る」とまではいかなくても、物心両面で「ぜひここで勉強したい」と思わせる環境作りは、その後の学生の成長にとって大きな要因だと感じました。（とはいえ、学校間の学籍異動が容易にならなければこれによるメリットは十分生かされないかもしれませんね。）

また何といっても、生活面で気になるのは食事の質です。この大学のカフェテリアは、これまで訪問したアメリカの大学の内でも（5—6校しか比較できませんが）上位に位置します。これといってずば抜けたものはありませんが、全般的に「食べられます」。町には数軒の中国料理店とかなりいけるタイ料理と中近東料理の店がありますが、日本食レストランはありません。留学生の最大派閥である日本人（多いときは100人以上いるらしい）がこれだけいて、一軒もないのは不思議です。腕に覚えがあって一旗挙げたい向きにはお勧めの地です。しかし娯楽施設はほとんどないので、家族持ちには落ち着いた町でも、若者には退屈な町かもしれません。そのせいで、平日は学校にいて週末はセントルイス（車で2時間くらい）などに遊びに出かけるようです。今回英語担当のDr. McCannはこの状況をして、“suitcase university”だなどと皮肉っていましたが、街に住みたがる昨今の若者の気質を反映した表現です。